The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	役割語の日中対照研究
Author(s)	劉, 翔
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76320
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　劉　翔　）	
論文題名	役割語の日中対照研究

論文内容の要旨

本論文は、金水（2014）『〈役割語〉小辞典』で挙げた日本語の役割語及び河崎（2017）の中国語の役割語についての指摘に基づき、特に方言、オネエことば、外国人を表現するピジンを中心に取り上げ、役割語の日中対照研究を行なった。その結果、日中両言語の役割語の特徴、各役割語が人物像とどのように結び付けられたか、役割語が他言語にどのように翻訳されたかが明らかになった。

以下、各章で述べたことを簡単にまとめる。

第1章

本章では、まず役割語の概念及び日本語の役割語の特徴について整理した。金水（2003）によれば、役割語は言語上のステレオタイプである。話し方と人物像とが結びつき、且つ社会的にその知識が共有されている時、その話し方を役割語というわけである。日本語の役割語は他の言語より表現手段が豊富で、特に重要な指標として、人称代名詞またはそれに代わる表現、及び文末表現が挙げられる。

次に、日英・日韓対照研究を中心に取り上げ、役割語の対照研究の現状について概観した。また、先行研究の蓄積に乏しいものの、中国語の役割語に関する研究成果にも触れた。河崎（2017）は、特に中国の方言ドラマにおけるキャラクターの言葉遣いに注目し、方言を中国語における役割語の重要な表現手段と指摘している。また、「オネエことば」を使用することでオネエキャラクターを、成語・熟語や古典を多用することで知識人キャラクターを想起させることなども中国語の伝統的な役割語的要素として挙げている。ただし、これらは言及しただけで、深く研究するには至っていない。

これらの先行研究は本論文の考察を行う基盤となるものである。

第2章

本章では、中国語で特に役割語が表れやすい「方言」を対象として、「方言と役割語」の視点から日中対照研究を行った。まず、中国のフィクション作品におけるキャラクターと方言とがどのように対応しているかを、実例を基に考察した。そして、中国語では方言がステレオタイプ化した人物像と結びつけられ、中国語における役割語の重要な表現手段であることが改めて確認できた。

次に、日中・中日翻訳への応用も視野に入れながら、日中両国の各方言に対するイメージ調査を行った。フィクション作品に、自国の各地域の方言を使用するキャラクターが登場した場合、両言語の母語話者がそのキャラクターに対してどのようなイメージを持つかを明らかにした。その結果、日中両言語それぞれの方言には独自のイメージがあるものの、相対的に印象が近いものもある。即ち、現代東京方言と普通話、東北方言と河南語、九州方言と湖南語、沖縄方言と陝西語には共通するイメージが見られるということを指摘した。

最後に、役割語と翻訳の側面から対照研究を行った。フィクション作品における日本語の方言、とりわけ〈関西弁・大阪弁〉に注目し、中国語に翻訳される際、どのように対応しているのか、訳本におけるキャラクターのイメージが原作のイメージと一致するかどうかを考察し、その一端を明らかにした。

結論を述べると、以下のようになる。

1. 翻訳作品の言葉遣いから受けるイメージは、原作のイメージと必ず一致するものではない。
2. 原作における〈関西弁・大阪弁〉を全て中国の標準語で翻訳し、最も一般的な「方言標準化方法」を採っている。

しかし、標準語を対応させることで原作における人物像、特に関西人の面白さ、金銭に執着する側面が十分に表現されたとは言えない。原文で方言を通して人物像が創造されている場合、訳文において方言の持つ役割語としての特徴をある程度反映させる必要があるのではないかと考えている。

第3章

中国語では、河崎（2017）が人物像と言葉遣いの結びついた中国伝統の「役割語」の一つとして、「娘娘腔（ニャンニャンチャン）」（≒オネエ（言葉））に注目し、考察を行なっている。しかし、使用されたデータは、主にCCLコーパス（北京大学中国語言学研究センター）及びネット上の書きこみ、テレビ番組（コント）から収集したデータを分析対象とし、フィクション作品での使用状況はほとんど論じていない。本章では、このようなオネエキャラ・オネエことばに着目し、金水（2003）役割語の観点から出発し、定延（2011）「キャラクタとことばの結びつき方」の考え方を援用し、日中対照研究を行った。

まず両言語のオネエキャラ・オネエことばに関する定義及び起源などを比較し考察した。日本語の場合、オネエことばの起源がサービス業と関わり、2000年以後メディア上のオネエキャラクターがステレオタイプ化され、男性性を残しつつ女性的な特徴を利用することによりエンターテイメント要素を付け加える役割を担った。それに対して、中国語の「娘娘腔」の場合は、中国の伝統文化との関わりもあるが、戯曲の「男旦」（女形）の演出でその声や話しぶりが今日のオネエキャラの役作りに影響を与えたと考える。フィクション作品においては、オネエキャラの外見や仕草が誇張的に女性的であるものの、自分のことを「男らしい」「真の男」などと自称することで、そのギャップが視聴者を笑わせた。コメディアンである趙本山の早い時期のコントで、すでに「娘娘腔」のようなキャラクターが登場している。また、ドラマや映画などのフィクション作品では、コミカルな雰囲気や見た目・行動などから来るインパクトをもたらすために、「娘娘腔」を作品にアクセントを付けるために登場させることも多い。例えば、1992年のコメディードラマ『编辑部的故事』、近年の映画としては『失恋33日』（2011年）などが挙げられる。

次に、日中両国のフィクション作品をそれぞれ選んで取り上げ、調査対象とするオネエキャラを音声、語彙、語法などの言語的側面と服装、化粧、仕草、目つき等の非言語的側面から考察した。その結果、日本語作品の場合は、語彙的要素と人物像の結びつきが非常に強く、人称代名詞と文末表現に依存して女性性が表現されやすい一方で、現代中国語では役割語的な言語要素が豊富ではないため、オネエキャラを作るのに「蘭花指」のような非言語的な要素の方がよりキャラを表現しやすいということがわかった。

最後、オネエキャラの発する言葉が他言語でどのように翻訳されていたのか、その翻訳の現状について考察を行なった。日本語原作から中国語に訳される際、役割語的な要素が削られたことが多い一方で、中国語原作から日本語に訳される際に、日本語訳では役割語的な要素が付け加えたためより効率的にキャラクターの人物像を表現していることが分かった。そして、ジェンダーに関わるキャラクターが両言語の特徴を踏まえてどのように翻訳することが可能か、また妥当であるかという点について私見を提示した。

第4章

本章では、フィクション作品において外国人キャラクターを表現するために用いられているピジンないし片言を中心に取り上げ、対照研究を行った。日中両国の作品において、それぞれ外部にある他者がどのように描かれているか、どのような言語的な手段が用いられているかを考察した。日本語側では、まず、中国人キャラを表現する〈アルヨことば〉を取り上げ、その特徴と歴史的形成をまとめた。次に、現代の日本語ドラマに登場する中国人キャラクターのイメージと言語的特徴を考察した。ピジン化した日本語としては〈アルヨことば〉がその典型であるが、近年は使用が少なくなっている。その代わりに「ね」語法が中国人の発話として用例が増えている。この「ね」語法は本来の「ね」の用法とは異なり、一種の誤用であり、中国人キャラクターを表現する手段の一つであることがわかった。「ね」語法以外に、「～のこと」の使用、助詞の脱落、母語の挿入、非丁寧体の使用、ことわざの誤用、促音の脱落、清音・濁音の誤り、などのピジン的な特徴も見られたという結論を得た。その後、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」から実例を収集し、中国人日本語学習者の終助詞「ね」の使用状況も考察した。そして、前後の文脈から見れば不自然と考えられる用例も見られたが、フィクション作品に現れた中国人キャラクターが使用するような「ね」語法は調査の限り見られなかったことを実証した。一方、中国語側においては、中国国内で作成された抗日作品に登場する日本兵の話す独特なことば、〈鬼子ピジン〉に着目し、その言語的特徴及び日本兵の描きかたを考察した。最後、当時の日中関係など歴史的背景を考慮しながら文化史的視点から対照を行った。

本論文で明らかにできなかったことは多々ある。特に第2章方言の部分に関しては、意識調査で得た日中両国の各方言イメージ結果が、実際にどのように翻訳へ応用させるかについての検討や実証研究も必要になってくる。対応する方言で翻訳してみて、両言語の母語話者に対して違和感がないかを確かめることを今後の課題とする。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　劉　翔　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	金水　敏
	副 査	大阪大学　教授	岡島　昭浩
	副 査	大阪大学　准教授	岸本　恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　役割語の日中対照研究

学位申請者　劉　翔

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　金水　敏

副査　大阪大学教授　　岡島　昭浩

副査　大阪大学准教授　岸本　恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語と中国語に現れた、役割語的な表現の類似点、相違点等について、この分野における先行研究論文である河崎深雪氏の論文に依拠しつつ、新たな資料を加えて、方言、オネエことば、外国人の表現（ピジン）という三つの観点から論じたものである。役割語とは金水敏が 2000 年の論文や 2003 年の著作で提唱した概念で、特定の人物像と深く結びついた話し方のパターンのことである。

構成は、「序章」「第 1 章　役割語の対照研究の前提」「第 2 章　役割語としての方言の日中対照研究」「第 3 章　フィクション作品におけるオネエキャラの表現方法」「第 4 章　外国人キャラクターを表現するピジンの日中対照研究」「終章」の 5 章からなる。巻末に、調査資料一覧と参考文献のリストを配する。

序章では、本論文の目的を述べ、各章の内容を予告している。役割語に関連する現象は、日本語においては豊富に認められるところであるが、外国語では必ずしもそうではなく、この観点から対照研究を行うことで各言語の新たな面に光が当てられるところとなる。日英、日韓等の言語間では役割語の対照研究が始まっているが、中国語に関しては必ずしもそうではない。先行文献として河崎深雪氏の 2017 年の論文を基底におき、方言、オネエことば、外国人を表現するピジンを取り扱うこととすると述べている。

第 1 章では、先行研究を概観し、役割語の概念および日本語における役割語の特徴について整理し、日英・日韓対象を中心に、役割語の対照研究の現状について述べている。乏しいながら、これまでの中国語の役割語研究の成果についても触れるところがある。

第 2 章では、中国語において特に役割語的表現の資源となる「方言」を対象とし、日中対照研究を行っている。まず日本語における役割語と方言についての先行研究を押さえた上で、中国のフィクション作品においてキャラクターと方言がどのように対応しているかを、実例を基に考察している。さらに、日中両国の各方言に対するイメージ調査を行い、フィクション作品に方言使用者が登場した場合、母語話者がどのようなイメージを持つかについて論じている。最後に、役割語の翻訳の観点から、日本語原作の対訳作品において、役割語としての方言がどのように表現されているか、また訳文におけるキャラクターのイメージが原作とどの程度一致するか、といった点について考察している。

第 3 章では、前提としてまず、両言語のオネエキャラ、オネエことばに関する定義及び起源等について考察し

ている。その上で、言語的表現と非言語的表現の両面から両言語を対照し、オネエキャラの表現方法を分析している。次に、オネエキャラの発話が他言語でどのように翻訳されているかということの現状について考察する。最後に、ジェンダーに関わるキャラクターを、両言語の特徴を踏まえてどのように翻訳することが可能か考察している。

第 4 章では、外国人キャラクターを表現するピジンに着目して対照研究を行っている。日本語側では、まず中国人キャラを表現する〈アルヨことば〉を採り上げ、その特徴と歴史的形成についてまとめている。フィクションにおけるピジン化した日本語として〈アルヨことば〉は典型をなすが、近年では使用が少なくなり、その代わりに「ね」語法による表現が増えているが、ここで特徴的な「ね」の用法が実際の中国人日本語学習者の発話に確認されるか否かについて「他言語母語の日本語学習者横断コーパス」を用いて検証し、否定的な結果を得ている。中国語側においては、抗日作品に登場する日本兵の話す独特なことばである〈鬼子ピジン〉に着目し、その言語的特徴及び日本兵の描き方について考察している。最後に、当時の日中関係など歴史的背景を考慮しながら文化史的視点から対照を行う。

終章では、ここまでの内容をまとめ、今後の研究の展開について述べている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、河崎深雪氏による中国語の役割語の資源としての、方言、オネエことば、外国人が使用するピジンに着目しつつ、先行研究としての金水、定延利之、河崎深雪らの論を深く読み込みながら、独自の新資料を提示することで、この分野における研究水準を大きく進展させた点が評価できる。例えば第 2 章で扱われた、方言話者に対して母語話者が抱くイメージについては、河崎論文では印象批評を出るものではなかったところを、小規模ながらアンケート調査を実施することで、実証の域に接近することができている。各方言について与えられる評価語については、パイロット調査によって精査を経たものを用い、日本及び中国について特定の地域に偏らないように広い範囲から回答を得ている。その結果の分析については、統計的手法が十分使いこなされてはいないため、単純な成果にとどまっているが、例えば日本の「大阪方言」は中国のどの方言とも似ていると言えないということを実証的に示した点などは評価に値する。多変量解析や被験者の出身地とのクロス集計など、今後の分析の高度化が期待されるところである。

第 3 章では、オネエことばという言語的な表現手段が日本語では発達しているのに対し、中国語では語彙や語法の面で目立った特徴を持たないため、「蘭花指」のような非言語的手段によってオネエキャラを表現する度合いが高いといった指摘は首肯できるところである。

第 4 章では、「アルヨことば」に代わる「ね」語法のリアリティについて、コーパスを用いて否定している点が新しいと評価できる。〈鬼子ピジン〉については、母語話者の利点を生かし、抗日作品の台詞を具体的に分析して見せているので、今後の発展が期待できる。

以上のように、本論文は新しいデータや手法を駆使して、当該分野の研究を大いに推し進めていると認められるのであるが、三つの観点の相互関係が必ずしも緊密に組織されておらず、散漫な印象をぬぐえない。申請者オリジナルの理論の展開にも物足りなさを感じさせる。とはいえ、相対的に学術的な水準は十分高い段階にあると言えるので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する次第である。